

ウェスレーの プラクティカル・ディヴィニティーと英国教会

坂本 誠

ウェスレーと英国教会については、2003年出版の『ウェスレー・メソジスト研究』において執筆しているので、それを踏まえつつ、ウェスレーの実践的な神学がどこから来ているのかを考えていきたい。

はじめに

ウェスレーは18世紀の英国を生き抜いた人物であり、英国教会との深いかかわりの中で神学を形成してきた人物である。ウェスレーは英国教会を愛し、英国教会人としての誇りを持っていた。1787年にウェスレーは「メソジストが英国教会を去るとしたら、神もまた彼らから離れるであろう。毎年多くの司祭が、私たちが真実と成長を証明していると確信を信じるようになってきている。今、分離することは一般論や良心とは反することである」¹と語る。さらに1788年に「自分は英国教会人であり、50年前に言ったように、今も私が不当に追い出されない限りは英国教会内で生き死ぬ」²と語っている。翌年にも以下のように語る。

¹ 手紙 to his Brother Charles, 1786.4.6 John Muesy Turner, *John Wesley - The Evangelical Revival and the Rise of Methodism in England-*, (Epworth Press, 2002), p.97 参照。

² 手紙 to Henry Moore, 1788.5.11

私は初代教会の次に自分の教会である英国教会を世の中でも最も靈的な教会であると考えている。それ故に私はすべての教理に同意するだけでなく、すべての典礼規定を可能な限りの正確さをもって、生命の危機の時でも守る。・・・私は英国教会の一員として生き、死ぬことを宣言し、私の見解を評価する者は何者もそこから分離してはならない³。

ウェスレーがいかに英国教会人であったかはこれらウェスレーの後期の発言から容易に推し量ることができる。ウェスレーは祈祷書に関しても絶大な信頼を寄せている。「私は世界の中で英国教会の祈祷書ほど、今昔の言語において確かで聖書的で理性的な敬虔さをもったものはないと信じる。200年前の言語であるが、純粹であるだけでなく、高度に華麗であり強靱である」⁴と書いている。ウェスレーの英国教会への姿勢は生涯変わらないものであった。ウェスレーの中には英国教会人としての誇りや思想が息づいていたと言っても過言ではない。

1. ウェスレーと英国教会 伝統と実践をいかに考えるか

ウェスレーと英国教会を考察するにあたり、どうしても欠くことのできない視点は、ウェスレーの中で、伝統を大切にしていける側面と実践的な改革がいかに関わっているかである。

まず、英国教会との関連で忘れてはならない著書にフランク・ペーカーの著書がある⁵。ペーカーはウェスレーの生涯を通して英国教会との関わりを事実

³ Thomas Jackson edited, *The Works of John Wesley*, Vol XIII, 272f. (以下 Works と表示)。

⁴ *The Sunday Service of the Methodists in North America, With other Occasional services*, cf. Rupert Davies, *Wesley and the Methodist Church in Great Britain*, (Epworth Press 1989), p.188.

⁵ Frank Baker, *John Wesley and the Church of England*, Abingdon Press, 1970. フランク・ペーカーはメソジストの牧師としての立場からウェスレーと英国教会運動を見つめる。更にマキシム・ピエト(Maximin Piette, *John Wesley in the Evolution of Protestantism*, New York: Sheed and Ward, 1937.)やジョン・トッド(John Murray Todd,

則して様々な角度から論述する。ウェスレーは英国教会から離れたことにおいて新しい教会論を提示したのではなく、英国教会の衰退を癒すものをもたらそうと試みた⁶。ウェスレーは英国教会を霊的に改革する為に、伝統的には存在しなかった様々な実践的方法を生み出した。ウェスレーは聖書、伝統、理性を重視したが、同時に宗教的な実践主義者であった⁷。ウェスレーと礼典との関係は、それが儀式としてではなく実践的、霊的な価値を包含したものであるという点にあるとしている。

ロバート・クッシュマンはウェスレーの神学を経験的の神学(Experimental Divinity)として紹介する⁸。クッシュマンはウェスレーが英国教会に土台を置きながらもメソジストソサエティを形成した背後には、ウェスレーが根本的に目指していたものが当時の英国教会には希薄だったからと語る⁹。ウェスレーはそれを英国内に昔からあったExperimental Divinity (経験的の神学)として再提示しようとした。クッシュマンはウェスレーの「経験的の神学」の内容を明らかにし、この用語が「救いの聖書的方法」と同義語であることを示す。「経験的の神学」とは論理的思考だけでなく実生活における経験の全体を示すものである。これは英国教会のクランマーにも見られる「生きた信仰」(living faith)と表現できる¹⁰。ウェスレーは経験的の神学の実現の為にメソジストソサエティを形成して

John Wesley and the Catholic Church, London: Hodddard & Stoughton, 1958)もこの系列に入れることができる。

⁶ Ibid. ベーカーはウェスレーの教理が決して大陸の宗教改革者のそれではなく、英国教会で生まれたものであるとし、クランマーの祈祷書への忠誠、フッカーの理性の尊重等をあげている。

⁷ Ibid., p.3.

⁸ Robert E. Cushman, *John Wesley's Experimental Divinity, -Studies in Methodist Doctrinal Standards-*, (Kingswood Books, 1989).

⁹ Ibid., p.21.

¹⁰ Ibid., p.21. ウェスレーは英国教会の1659年の信条を継承していた。ウェスレーは1738年2月にアメリカより帰国した後、エドワード6世の時代にクランマーを中心に作られた英国教会の説教集を編集出版するべく努力している。この説教集にはパウロの義認の強調とヤコブ書の業の強調が矛盾しておらず、合致しているという言及もあり、ウェスレーの目指していたものと一致する。

Thomas C. Oden, *John Wesley's Scriptural Christianity -A Plain Exposition of His Teaching on Christian Doctrine-*, Zondervan Publishing House, 1994, p.205.

いく上で牧会と礼典の役割を重要視する。「ウェスレー神学にとってクランマーが提唱した「生きた信仰」と教会論、牧会論、礼典論は相互補完的に機能し、根本的なものであった¹¹。クッシュマンの貢献は、ウェスレーを英国教会の伝統的な神学的伝統と実践から切り離すのではなく結びつけたことにある。これはウェスレーが英国教会を愛していたことにも繋がる。

日本において、この分野でとても重要なのは岸田氏の文献であるが、これに関しては後述することにする。

2. ウェスレーの見解

聖餐やリタジーへの尊敬を持つ高教会主義者として出発したウェスレーが野外説教や、自由祈祷、そして讃美歌を駆使しながら英国教会から結果的に分離していく過程は一言では述べ尽くせないことは言うまでもない。ウェスレーもそのことを認めて1760年の年会で以下のように語る。

問：我々は分離派なのだろうか。

答：我々は不規則(irregular)ではある。

1. 神の支配するすべての場所で罪人を悔い改めに招くことによって
2. 自由祈祷を頻繁に使用することによって¹²。

野外説教、自由祈祷はこれまでの英国教会の伝統から考えれば確かに不規則ではある。ホートン・デーヴィスも著書の中でメソジズムの礼拝の特色は英国教会のリタージュカルな側面と自由祈祷の両面の組み合わせであったとしている¹³。これは英国教会にはなかった新たな伝統であった。

¹¹ この点に関してはウェスレー・メソジスト研究において考察した。坂本 誠、「ウェスレーとプラクティカルディヴィニティ」、『ウェスレー・メソジスト研究 Vol.1』参照。

¹² Minutes of Conference I, 1766, p.58. Tyerman, *Life and Times of John Wesley*, vol. II, p.576. John Truner, *John Wesley*, pp.99-100 参照。

¹³ Horton Davies, *Worship and Theology in England—From Watts and Wesley to Martineau, 1690-1900-*, Eerdmans, 1962, p.184.

さらに、ウェスレーは職制を通常のもの(ordinary)と特別なもの(extraordinary)に分け、むしろ特別な職務に優位を与えていた¹⁴。聖霊によって与えられた職務が、一般の職務よりも優先権を持っているというのである。ではその先にある目標とは何なのか。それは福音宣教という名目である。ウェスレー自身の言葉を聞こう。

私は自分を弁護する。私は若い時から、今でもそうであるが、英国教会の一員であり教職者であるし、あり続けてきた。そして私は自分の魂が肉体から離れるまで英国教会から分離するつもりはないし、計画もない。しかし、神が私に行うように要求されることを怠っていないのに、そこにとどまることを許されないなら、すぐにでも分離することが私の義務に適合し正しい。(途中省略) 詳細に言うと、私は神が自分に福音を広めることを委託されたと信じている。そう、私自身の救いは、それを宣教することに依存している。(途中省略) そうであるので、私が福音宣教を怠ることなく、福音を語ることをやめることをしないで、教会にとどまることができなかつたならば、教会から分離すべきであるし、さもなければ自分の魂を失うことになる¹⁵。(傍線筆者)

ここに、生涯英国教会の中にとどまり続けたいと欲したウェスレーの姿がある。しかし、ウェスレーにはより大きな神からの命令が聖書的な概念として存在していた。それは福音宣教という大命令であり、この原則を遂行するためには英国教会の一員としての自覚も下位に置かれるのである。このことを逆に考えればウェスレーにとっては、福音を宣教することが教会の秩序を決定し、宣教することと礼典を司式することには区別がなされていたともいえよう。これはウェスレーの説教の態度に最も顕著にあらわれている。ウェスレーの説教は誰に

¹⁴ この見解は、藤本満、「教職制—歴史的考察と諸問題—」、『宣教研究員会論集1 職制と按手礼』、インマヌエル総合伝道団宣教委員会 1999 参照。また林牧人、「日本メソヂスト教会における監督制の背景 —メソヂズムにおける episkope の実践—」、『ウェスレーとメソヂスト研究2』、2001 参照。

¹⁵ BE Works III 67., Sermon #75, On Schism II-17.

向かって語られたのか。実はこの問いが最も重要な問いであるとする。ウェスレーは信仰による救いの中で以下のように語る。

それでは、われわれはだれに説教すべきではないのか。だれをわれわれは除外すべきなのか。貧しい人々をか。否、それどころか、彼らはその福音を説教されるべき特別な権利を持っている。無学な人々をか、いや神はこれらの事柄を、始めから、無学な無知な人々に啓示してきたのである。・・(途中略) それ故に除外されなければならない人があるとするとするならば、富める人々、学問のある人々、世評のよい人々、道徳的な人々である¹⁶。

説教の対象は、ただ単に教会の中に集う信徒だけではなかった。教会の外側にいて、怠惰が故に貧しいと言われていた人々に福音宣教を行うことを大切にしていた。ウェスレーは、「世界はわが教区」とするが、英国教会には教区制度がある。教区を越えて伝道活動を展開し、世界を教区と考えていたウェスレーに対して非難は不可避であった¹⁷。

ウェスレーの牧会は実践的な側面が強い。英国教会の人々から見ればウェスレーの牧会がピューリタンの分離主義者のように見えたことも否めない。英国教会の歴史神学者であるノーマン・サイクスはウェスレーを評して以下のように述べる。

英国における 18 世紀の宗教の最も偉大な人物であるジョン・ウェスレーをエキュメニカル運動のどこに置くかは非常に困難である。ウェスレーは多くの点で英国及び新世界の宗教生活に触れ、世界が自分の教区であるという主張を誇り高く為したのであるが、彼の宣教努力の主な原則は新しいソサエティの基礎になり、キリストの普遍的な教会の分離された別の会員

¹⁶ 説教 1 「信仰による救い」 三・7

¹⁷ *Earnest Appeal, Part I*, vi, 9. ウェスレーはこの種の攻撃に対してはオックスフォード大学の研究員として自分はどこでも説教できるとしている。ここでは国教会の説教者としての立場からかなり自由になっているウェスレーの姿を見ることが出来る。

をもたらしてしまった。・・・新約聖書の主教と長老を同一視するという彼の確信に関して、彼が自国のかなりの数の人々の意見と同調し、ソサエティと既存の教会の障害を取り除く代わりに牧者に按手を施したことは、彼らの会員を増加させ最高潮に達することをもたらしてしまった。このように時代における最も偉大な宗教的指導者は普遍的教会の分離を癒すよりもそれを加速化してしまったのである¹⁸。

ウェスレーの按手が主教制按手に生きる英国教会との分離をもたらしてしまっただことは事実であるが、ウェスレーの意図はどこにあったのだろうか。本論文では、ウェスレーが英国教会とどのようななかかわりを持ったかを、ウェスレーの実践神学の視点、特に恵みの手段を参考にしながら考察していく。

3. ウェスレー神学の魅力

ウェスレー神学の一番の魅力は神学の包括性が何かと問われるならば、筆者は迷わずバランスだと考える。ウェスレーにとっては、信仰と行い、神の主権による救いと人間の応答などが実に両立するものとして捉えられている。ウェスレーの基本は、英国教会の三支柱（聖書、伝統、理性）に基礎を置きながら、それに体験を加えたことにあると言われるが、ウェスレーは自分の立っている根拠について以下のように言い表す。

子どもの時から、私は聖書と神の託宣を愛し、尊敬するように教えられてきた。この2つの次に来るものとしては、最初の3世紀の著作家である初代教父たちである。初代教会の次に、我々自身の世界の中で最も聖書的な国民教会である英国教会が来る。それ故にすべての教理に同意するだけでなく、リタージの中にある礼拝形式を自分の人生の危機の時にもできるだけ正確に守っている。この判断と精神で、私は、聖書、初代教会、英国教会に強く依拠しながらアメリカに行った。私はこの3つのものからほん

¹⁸ Norman Sykes, in R.Rouse and S. Neil(eds), *A History of the Ecumenical Movement 1517-1948*, SPCK, 1967, pp.164-5.

の少しも異ならない¹⁹。

ここには、聖書の中にあらわされている神の意志への従順と、英国教会の伝統に従っていくウェスレー像がある。その彼がどのようにして体験をも加味された認識理解に立ったのか。まず理性についての取扱から見ていきたい。

1) 理性の取扱い

ベンジャミン・ウィチコート (1609-83) は、信仰と理性の調和を求めたケンブリッジプラトニストの一人であるが、『自然の理性の正しい使用』の中で以下のように理性を語る。

理性は非難されるべきでなく、神の恵みから放置されたものでも、過小評価されたり。無効にされるものではない。・・・理性は神の基礎を持っているからである。人の中の霊は主のろうそくであり、神によって灯され、人を神に向かって輝かすものである。これは効率的な側面で言えば神からのものであり、最終的には神に至るものでもある²⁰。

ここには、信仰と理性の調和が書かれている。理性は神から与えられ、人は与えられた理性を神に向かって使用するという理性への積極的な考察が述べられている。

一方、当時の思想界を見れば、生得概念を否定し、人間は本来白紙の状態であり、経験の集積が観念を形成すると理解するロックの立場があった。ウェスレーはロックとは違い経験が全てであると考えずに、経験や理性の限界に注意すべきことを痛感していた。ウェスレーは以下のように信仰について語っている。「信仰は理性的な基礎の上の命題への承認である。理性的な基礎なしではどのような信念もなく、それゆえに信仰もない。しかし私たちは救いに入れられ

¹⁹ Works VIII, p.272.

²⁰ Edited by G.R Evans and J. Robert Wright, *The Anglican Tradition – A Handbook of Sources*, (Fortress Press 1991), pp.284-285.

ることを聖書に照らして教えられる」²¹。ここでは、信仰における理性の役割を認めた上で、最終的には聖書に最終的権威を置いている姿を見ることができ。しかし、それを認識する為には理性のみでは不十分である。認識において重要なのは聖霊の役割である。

聖書が明言するところをわたしたちに理解させるものは、聖霊に助けられた理性ではないか。神が人の子を取り扱われる方法、すなわち、神の時の配分、旧約と新約、律法と福音の性質について私たちが幾分でも理解することを可能にするのは理性によるのである。神の御霊が私たちの理解の目を開き、また照らして下さり、私たちは理性によって以下のことを知るようになる。・・・²²

ウェスレーには 2 つの理性理解があった。アングリカンから受け継がれた、教会の教理への理性的承認と聖霊による知覚、認識である。前者は、英国教会の伝統であり、エラスムスの自由意志論に基礎を置き、理性・主体性を重んじながら宗教主義的立場をとるものであった²³。しかし、理性は信仰を把握する上で必要なものであるが、最終的な権威ではない。ウェスレーにおいては理性以外にも宗教知識への深い感覚が必要である。ウェスレーには確証の教理があり、聖霊の働きにより与えられる深い認識を強調する。ウェスレーには先行する恵みという概念があり、自然と恵みを対峙させることなく、理性を含むすべての知識を神の恵みに基づく「恵み深い」知識と捉えた²⁴。ここにウェスレーの神の主権と人間のそれに応答する働きという包括性が存在する。

2) 熱狂主義者という批判に対して

この理性理解が明確に発揮されるのは、ウェスレーのリヴァイヴアルに対し

²¹ Letters Volume I, p.22. 1725 年 7 月 29 日の母スザンナへの手紙

²² デマレー、『ウェスレーの黙想と祈り』、福音文書刊行会、1985 年、50 頁。

²³ 清水光雄、「ウェスレーと他宗教」、『ウェスレー・メソジスト研究 3』、2002 年、ウェスレー・メソジスト学会・教文館、24 頁。

²⁴ 同論文。

て英国教会側の批判が起こってきた時である。1742年にはジョゼフ・タッカーというブリストルの教区牧師やジョセフ・パトラーはウエスレーの運動が「信仰による義認」と「罪なき完全」という二重の福音を語っているという批判を出版する。さらにジョージ・ラヴィングトン(George Lavington)のウエスレーへの攻撃は最も激しいものであり、メソジストの霊的な経験を対象にして攻撃した。英国教会の人々にとってウエスレーの宗教、神学は熱狂主義的なものと映ったのである。清水はこの批判を「宗教を理解する際、宗教理解を客観的な理性的思惟や道徳の内にのみ置くのか、それとも内的自己意識に置くのか、という問題が英国教会の中にあった」とする²⁵。英国教会内部には前者の信仰理解しか存在しなかった。ウエスレーの中には信仰に対する理性を通しての承認という国教会特有の姿勢があったのであるが、これに加えてウエスレーはもう一つの認識形態であるエレグコスなるものを語る²⁶。それは内在的な、主観的宗教知識であり、体験が重視されるものであった。近年出版されたヘンリー・ラックは、ウエスレーを「理性的な熱狂主義者」だと定義する²⁷。この発言はウエスレーの内的自己認識をも含めた理性理解を言い当てていて興味深い。

3) 主教による按手について

このような、ウエスレーの立場は、最重要課題である主教による按手にもみることができる。アングリカニズムの権威理解に関して重要な役割を担っているのはリチャード・フッカーである。フッカーは、権威の源泉を「聖書」のみならず、「聖書」「伝統」「理性」の三要素に分散させた²⁸。フッカーは、

²⁵ 清水光雄、『ジョン・ウエスレーの宗教思想』、日本基督教団出版局、1992年、115-116頁。

²⁶ 同書 ウエスレーにはエレグコスというギリシャ語に信仰の本質的定義を加えようとする。これは目に見えない物の「確証」「確信」を指し、ウエスレーは信仰を二重に定義する。聖霊によって開示された感官という信仰理解と、この霊的感官を通して霊的世界をいるという人間の知覚行為としての信仰理解である。

²⁷ Henry Rack, *Reasonable Enthusiast—John Wesley and the Rise of Methodism*, Abingdon Press, 1993.

²⁸ 西原廉太、『リチャード・フッカー その神学と現代的意味』、聖公会出版、1995、64頁。

『教会政治理法論』の中で、「理性」が聖書のより正確な解釈のための全体であり、また聖書が明白に指示していない課題についての判断を決断する鍵であるとする²⁹。さらに、フッカーは、「聖書」と解釈学的意味における「理性」に第一義的価値を与え、「伝統」に第二義的価値を与えた³⁰。

フッカーは『教会政治理法論』の第7版の中で長老と主教の関係について、長老も主教も両方とも使徒を継承しているのであるが、その中で、「通常は主教は長老よりも優位に立つ。従って按手をする権利は主教のみに在る」とする³¹。しかしベーカーによれば、フッカーはその主張を絶対的であるとは考えずに、神は状況によって通常的手段以外にも特別な手段を例外的なものとして有効なものとしたと主張している³²。(筆者傍線)

一方、ウェスレーは人の手による通常の手による召命と共に、聖霊の促しによる特別な召命の両方を信じていたのであるが、二人の違いは、フッカーのようなくまでそれを例外とみるか、それとも、ウェスレーのように聖霊の促しによる特別な召命に積極的な意義を与えるかに集約されるのかもしれない。しかし、この違いが大きな結果をもたらしたことも事実であり、そこにウェスレーが英国教会から分離していった要因も存在するとも言えよう。

4. ウェスレーのプラクティカルディヴィニティ

それでは、そのようなウェスレーの実践的な神の生を生きる神学形成において重要なことは何なのか。ウェスレーの意図はどこにあるのだろうか。

1) ウェスレーの思考秩序

²⁹ 同書、71頁。フッカーは聖書のみを絶対的根拠としてドグマ的に解決することに断固抵抗した。

³⁰ 同書、80頁。この意味で伝統は限定された権威である。

³¹ *The Works of Mr. Richard Hooker*, arranged by Rev. John Keble, 7th edn. revised the R. W. Church and F. Paget, 3 vols, Oxford, 1881, III, 154-5, 168-9. Baker, *John Wesley and Church of England* p.64 より参照。フッカーはさらに、神御自身が、しばしば特別な例外を通常の規則に反して有効なものとすると言語。

³² Baker, p.64 を見よ。The Works of Richard Hooker, III, 231-232.

ウェスレーが物事を判断していく順序を以下のように結論できる。第1に彼は聖書が自分の行動を承認しているかどうかを問う。第2に初代教会の精神や使徒の伝承を正統的に継承しているかどうか。第3に神によって導かれている経験と比較して、今の経験が有効であるかどうかを理性的に考察する。以上の要素がすべて合格ならば彼は一度それを試してみる。そして一度それが確認され、御心にかなった結実をもたらすものであるならば、それをどのような迫害があっても実行する。ウェスレーにはいくつかの認識する上での関門があり、それを経ながら活動する彼は冷静な判断を下せることになる。

聖書を中心としつつ、伝統、理性を最後の経験 (experience) において実験的 (experimental) に検証 (experiment) するというものである。ウェスレー神学のダイナミックさはこの四番目の支柱である経験にあると言っても過言ではない。経験は聖書、伝統、理性的承認を「生きた信仰」(主教クランマーからウェスレーが得たもの) にする重要な要素なのである。ここにウェスレーの実践性、経験性を見ることができよう。

ランヨンはウェスレーの体験を、オーソドキシシーとオーソプラキシシーの両方としてみた³³。正しい教えは正しい経験を生みだし、正しい実践となっていく、正しい情感を獲得するという順序がある。ウェスレーの目指していた宗教は心の宗教と呼ばれる。ウェスレーは、英国教会内に基礎をおきながら心の宗教を強調したウェスレーの独自性を見ることができると思う。

2) ウェスレーの目指すもの

それではウェスレーの意図はどこにあるのか。その事についてウェスレーは以下のように語る。

私は平易な真理を一般的な人々にもたらそうと計画する。その目的の為に、

³³ Theodore Runyon, *New Creation*, Abingdon Press, 1981, pp.147-152 を参照。「オーソドキシシー」と「オーソプラキシシー」という用語を最初に使用したのはテオドア・ランヨンであった。ランヨンはウェスレーの特色としてオートパシー (正統な感情) を含めた3つの用語でウェスレー神学を理解する。正統な教理、正統な実践、正統な感情の三位一体を説く。

私はすべての慎重を要する、哲学的な思索やこみいった複雑で難解な理由づけを断ち、できるだけ、しばしば原典より引用しない限り、学びのショーをも避ける。私は日常生活で使用されない、難解な言葉、特にディヴィニティーの大系で頻繁に使用される専門用語を避けるように努める。書物における人の語り口は個人的な慣用語であるが、一般の人々には未知の言葉である。我々は気づかない内にそのような過ちを犯すかもしれない。しかし、我々自身に身近な言葉は、世のすべての人にも身近であると信じる³⁴。
(筆者傍線)

これはウェスレーが「平易な真理を一般の人々に(Plain truth for plain people)」と言っていた事にも通じるものである。ウェスレーのめざすところは、まさに「一般的な人々にもたらす事、その為に手頃にする事」であった。更にウェスレーの視野には教会的な視点があり、そうすることによって「合同の共通の絆を探す事」であった。これは以下のアングリカンの伝統とも一致する。

神学は神の知識というよりも神の生そのものなのである。天においては、我々は最初に見る、そして愛する、しかし地上では我々は最初に愛さなければならない、そして我々は知覚し、理解する³⁵。

ウェスレーにとって、信仰・神学は経験的に神の生を生きることとして展開されているのである。このことはウェスレーが聖化の本質を「自分のすべてを通して神を愛すること、「自分を愛するように隣人を愛すること」とした事とも関連している。

ウェスレー神学者のクッシュマンは以下のように語る。「17世紀におけるディヴィニティーの用語は神についての合理的な説明である神学とは異なる。むしろディヴィニティーは聖霊の啓発し回心させる業による救い主なるイエス・キリストの自己啓示

³⁴ Works V, p.6.

³⁵ Stephen Sykes and John Booty, *The Study of Anglicanism*, SPCK (Society for Promoting Christian Knowledge) (1998/7/30), pp.116-117. これはジェレミー・テイラーの提案した神学として解説されたもの。

を意味する。それ故に16～17世紀のディヴィニティーの使用法は人間の救いの方法や本質、福音を研究する神の救いの三位一体的教理である」³⁶

ウェスレーのめざしていたディヴィニティーは、客観的に神を観察するという神を語る (theos-logos) という主観—客観構造に基づいたものではない。むしろ神の救いが人間を変容し、刷新していくという既に人間が神の恵みの中に存在している主観—客観構造を超えたところに存在する「生きた信仰」の総体を神学 (divinity) と呼んだのである。「プラクティカルディヴィニティー」は「生きた信仰」(クランマーの言葉)「真実の宗教」「内的宗教」「救いの聖書的方法」という言葉で表現できるものなのである。

3) ウェスレーの救済論

ウェスレーの神学は救済論的目標を持った神学である。その中でも重要な用語には聖書的救いの方法 (Scripture Way of Salvation) がある。聖書的救いの方法とは、救いの順序 (Order of Salvation) に則したクリスチャン信仰の成長の全体的プロセスを指す。そこには信仰と業、儀式的な形式主義と儀式にこだわらない福音的に自由なスピリチュアリティという相反するものが包括的に捉えられ展開されている。聖書的救いの方法とは具体的にはどのようなことか。

私は一つの事、天国に至る方法、いかに幸福な彼岸に到達するかを知りたい。神はその方法を教えてください。この目的のために神は天より来られた³⁷。

ウェスレーの救済論は、彼が救いに天国に至るという目標を持たせたことから明白である³⁸。この場合、天国に至る「方法」とは、天国に至る為の「様式」(mode)「方

³⁶ Robert Cushman, *John Wesley's Pactivical Divinity, -Studies in Methodist Doctrinal Standards-*, Kingswood Books, 1989.

³⁷ Albert Outler, *Sermons*, 1:105, Preface.

³⁸ Kenneth J Collins, *The Scripture way of salvation -The Heart of John Wesley's Theology*, (Abingdon Press, 1997), pp13-17.

式」(fashion)を意味す³⁹。これは天国に至る道程(Via Media)とも言えると考えられる。ここからも、ウェスレーの聖書的救いの方法が神の生を生きる、クリスチャンの生の目標でもある実践的なものである。

5. ウェスレーの恵みの手段

救済論的に展開する上で欠かせないのが恵みの手段の要理である。しかし、ここにも筆者は英国教会の基礎を見ることができると信じる。ウェスレーは恵みの手段を重要視してきたことは言うまでもない。ウェスレーは恵みの手段の使い方について以下のように語る。

神が罪人をご自身にひき戻す為に、これらの恵みの手段を使用することを喜んでくださる秩序があります。しかし、聖書においては特別な秩序に関する命令は何も見出すことはできません。神の摂理と霊は多様に働いて自らの計画を示します。人々が導かれる手段、神の祝福を見出す手段は様々であり、別のものが使用されたり、数千の異なった方法で結び合わされたりして用いられます。私たちは、知恵を用いて、私たち自身が神の恵みを求める手段として主の摂理と聖霊の導きに従います。というのも神はご自身の現実的な計画によって私たちを導き、ある時にはある恵みの手段を、別の時には他のものを用いながら、主の自由な御霊が私たちの心の中に最も喜んで働く方法を用いられ、私たちが具体的に経験できる仕方でも働いてくださるのです。

一方、神の救いを求めて、叫び声をあげているすべての人々への確かで一般的な規則は以下のようなものです。機会を用いて、神が制定されたすべての手段を使用しなさい、というのは数あるうちのどの恵みの手段で神があなたに出会って下さるかを誰も知ることはできないからです⁴⁰。

³⁹ Ibid., p.13.

⁴⁰ Sermon 16, 'Means of Grace', V-3.

1) 高教会主義的アルミニアニズムに立つウェスレー

岸田 紀が『ジョン・ウェズリ研究』⁴¹を 1977 年に出版し、英国教会の中の高教会主義的アルミニアニズムに立つウェスレー像を打ち出した。岸田は英国教会史の一面からウェスレーの運動を分析し、普遍的恩恵説に立つアルミニアンウェスレーの倫理体系が「特殊的召命」思想を欠き、「よきわざ」に職業労働を含めない点を確認している。

岸田は、ウィリアム・ローの召命観とジェレミー・テイラーの返還の思想を引き合いにだしながら、ウェスレーのアングリカン高教会主義者に立つアルミニアン神学に則った慈善理解を強調する⁴²。ローとテイラーは英国教会の司祭であり、高教会派に属し、ウィリアム・ロードの思想系列であり、神学系統としてはアルミニアニズムに位置する。岸田はウェスレーの「よきわざ」理解は、アルミニアンの主張する「普遍的召命」の「わざ」である「断食、祈り、慈善」という世俗外的な三種の「よきわざ」を意味し、それは高教会アルミニアンの「よきわざ」理解に立ち、カルヴァンの「職業」倫理体系における「よきわざ」の「職業」労働とは異質のものであると結論する⁴³。ウェスレーがテイラーから学んだ不正な富の返還の思想は慈善理解と合致する⁴⁴。

それらの具体的方法は何であったか。(1) すべての人にできるかぎり善を行うこと、(2) 機会のあるかぎりできるだけ聖餐を受けること、(3) 国教会の断食日を厳守することであった。そこにあるものは慈善という考え方であり、聖餐と断食の必要性であった。ウェスレーは岸田が言うように、「祈り、断食、慈善」という高教会的な三種の「よきわざ」の「方法」化、「規則」化によって、「聖潔な生活」を組織し、「審判日」における「永遠の救い」への道である「キリスト者の完全」の「完全な愛」を追及し

⁴¹ 岸田 紀、『ジョン・ウェズリ研究』、ミネルヴァ書房、昭和 52 年。(1977)。

⁴² 同書、1-11 頁。(前書きの項参照)

⁴³ 同書、10-11 頁。

⁴⁴ 同書、152-155 頁、172 頁、323-324 頁、326 頁。当時はアダム・スミスの『国富論』も出版されているが、ウェスレーは富の蓄積ではなく、富の返還を強調する。

たのである⁴⁵。ウェスレーの原点には英国教会の伝統があったのである。

近年の研究において、ピューリタンの倫理大系が明らかになるにつれて、ピューリタンの倫理とウェスレーの倫理大系の類似点が強調されるようになったことも事実である。今後の研究が待たれるが、アダム・スミスの『国富論』が出版され、国全体が資本の蓄積を容認する中で、ウェスレーのこのような役割は重要であったと考える。

2) ウェスレーのソサエティ運動

ウェスレーのソサエティ運動には 3 つの運動に起点を持つと言われる。一つは 1729 年 4 人がオックスフォード大学で集まりはじめた時、ウェスレーの初期の活動ホーリークラブには主に 4 つの活動があった。オックスフォードの牢獄訪問、貧しい家族の訪問、救貧院の訪問、恵まれない子ども達の学校の為の奉仕等である。そのような具体的行動の背後には法則化、規則化が存在した。第 2 は、1736 年 4 月サバンナで 20 人から 30 人が集まった時、そして第 3 は 1738 年 5 月 1 日、ロンドンで 40 人から 50 人が毎週水曜日の夜に会話を持とうと集まった時からであった。その会は祈りと賛美で始まり、終わったと言われている⁴⁶。

ウェスレーのソサエティ運動の中でも聖餐において特筆すべき場所はウェスト・ストリートチャペルである。ご存知のように、ウェスレーにとって、フェッターレイソサエティが重要な役割を演じたのであるが、途中分裂が起こって、その後、ウェスレーの活動拠点はニュールームに移る。1739 年にはウェスレーのソサエティは連合ソサエティとなっていくが、1743 年に、ウェスレーはウェストストリートにチャペルを手に入れる。最初のメソジストの聖餐式は 1743 年 5 月 29 日に行われた。その礼拝は午前 10 時に始まり、午後 3 時まで続いたと言われている。ウェスレーはこのチャペルをこよなく愛し、礼典のセンターとして考えていた。⁴⁷ このチャペルでウェスレーはアングリカンの朝礼拝、夕礼拝の式文が読まれ、主の晩餐がメソジストによつ

⁴⁵ 同書, pp.314-15 頁。

⁴⁶ Works XIII, p.307. Baker, op. cit., 74 参照。

⁴⁷ Baker, op. cit., p.85. ウェスレーはこの場所を説教所やソサエティの部屋と呼ばずチャペルと呼んだ。

て、メソジストの為に執行されたのである。メソジストのチャペルで行われた主の晩餐は英国教会のそれと同じではなかった。賛美がなされ、自由祈祷も用いられるスタイルであった。ペーカーによれば、その時歌われた讃美歌は、1737年の詩編と讃美歌集および1745年の主の晩餐の為に讃美歌が使用されたと言われている⁴⁸。

6 ウェスレーの実践

ウェスレー兄弟にとって、最も特徴的な2つの要素を次にみていきたい。それは兄ジョンの野外説教と弟チャールズの讃美歌である。

1) 野外説教

ジョンは、英国教会の伝統で育ったので、教会堂内でのみ説教は行われるべきであると考えていた。ジョンにとって野外で説教することは挑戦的な事であった。最初は、戸惑ったウェスレーであったが、次第に慣れ、この新しい方法を用いて礼拝を行うようになっていく。そこには、炭坑労働者をはじめ、様々な人々が集まって礼拝が守られる。ウェスレーはブリストルで野外説教を始めるが、一人の魂をどこまでも追い、救いをもたらすことが何にもまして優先したウェスレーの実践性を見る思いがする。ウェスレーは、英国教会の礼拝所のない工業都市を選んで貧しい聴衆に説教した。ここからキングスウッドスクールの建設につながる。

2) 讃美歌

チャールズは多くの作詞をしているが、彼の讃美歌はメソジストの礼拝にとって欠くことのできないものであった。チャールズの作詞の基本は「平易な言葉で一般の人々に理解できる」ということであった。それを当時の流行歌につけて歌った。この讃美歌は大きな役割を果たすようになった。野外で皆が心を合わせて一つになって讃美歌を歌うこともメソジストリヴァイヴアルの原点で

⁴⁸ Ibid., p.86.

あった。讃美歌の大切なところは神学的・教理的な面を讃美すること。つまり、讃美歌は教育的な要素を持っていた。更に、讃美歌は感情豊かな心情を人々にもたらした。また聖歌隊の讃美は当時も一般的であったのがあるが、会衆讃美によって礼拝出席者が、自分も礼拝に参加しているという帰属感を感じることができた。

メソジストの讃美歌集は、実践的、教理的な意味合いをもたらしている。讃美することにおいて自己の信仰が問われ、自己の信仰を刷新しつつ、聖化の道を歩む人々を力づけ、信仰に火を灯し、献身の思いを新たにす。実践的な神学を讃美することによって愛に満ちた真実のクリスチャン生活が体験できた。

チャールズは、貪欲に賛美することを強調した。ただし、大声でどなるように賛美するのではなく会衆と合わせて慎み深く讃美するように勧める。ゆっくりすぎることなくリズムに合わせて讃美する。ウェスレーの死後、オルガンと共に讃美することが許可された。

チャールズの讃美歌の霊性は「信仰の確かさ」でもある。信仰の確かさとは、自己の確かさではなくキリストの救いの確かさを示す。ウェスレー兄弟にとって讃美歌は神学教育と霊的向上の手段であると共に、メソジスト全体を規定していたものである。特に聖餐時にうたわれる讃美歌は、メソジストの霊性にとって欠くことのできないものであった。

結論

元来、英国教会は社会全体を視野にいれて牧会を展開していく。特にフッカーは教会政治についての思考の中で社会全体への福祉概念を強調していた国民教会的概念としての教会論を強調する。それはフッカーが見える教会と見えない教会という区別を否定したことにあらわれている。国民教会的概念とは、国家によって支配される概念であり目に見える教会を含めて、そこに住んでいる存在者の精神的、物質的側面の福祉に責任を持っている。司祭は人々の魂だけでなく実際の側面にも関わりを持っている教会像である。受肉の教理の立場に立つなら政治と宗教は批判的に関係しあうものであり、相関性によって現実と直面していく必要がある。そのような観点でみれば、政治と宗教の分離は危険である。ウェスレーも同様の路線に入れることができる。彼は人々の社会

的福祉という観点から貧しい人々への関わりを自然の事として受けとめていた。特に信仰と業の包括性は英国教会から受けた恩恵であることはまちがいない。

しかし、何よりもウェスレーにとってソジストであることの一歩の使命は宣教、証し、信仰者の成長だったのである。ウェスレーの牧会においては、教職中心の教会形成だけでなく、信徒と共同の牧会概念があったことを指摘した。この背後には権威の分散があったと言える。さらに、この論文では触れなかったが、女性の登用は自由の象徴でもあった。これまではあまり教会においては重視されてこなかった女性への役割を重視した。ウェスレーの目指した教会は、教職主導の教会形成から、信徒と教職が共同した形での教会形成である。民衆の力へと教会を形成する力を還元したウェスレーの姿があるように思う。ウェスレーの運動は当時の教会観を凌駕していた運動であった。それには一つの目的があった。一人でも多くの貧しい人々に有効に福音を伝えたいという思いが最終的には勝ったのである。

本論文ではウェスレーのプラクティカルディヴィニティを考察した。聖書、伝統、理性という3支柱の他にウェスレーは聖霊の導きによる確証、経験を重要し、聖なる気質形成を重要視してきたことを論述した。ウェスレーの社会的な視点（慈愛の業）は敬虔の業（義務倫理）と共に働き、共同体的な恵みの手段を媒介として、総合的に理解されていることを考察した。メソジストの霊性形成が、聖なる気質の形成として捉えられ、まさに聖化の恵みの中を歩む姿が浮き彫りにされている。

ウェスレーはこの時代に向かって「このように真剣に神に向かって生きることが、貧しい人々、抑圧された人々を究極の関心として生きることであることを語り、このように生きない教会が地獄の火に焼き尽くされる」⁴⁹ことを時代を超えて語っているのだ。野外説教のケリュグマと社会のオイクメネの中にメソジスト神学は作り上げられ、メソジストの弟子としての訓練がその正当性を高らかに鳴り響かせているのである⁵⁰。

(ナザレン神学校・校長、小岩教会牧師)

⁴⁹ BE Works I, p.616

⁵⁰ David Lawes Watson, in *Aldersgate Reconsidered*, edited by Randy L. Maddox, Abingdon Press, 1990, p.36.